様式２

令 和 ２ 年 度　自 己 評 価 表

鳥取県立鳥取盲学校

学校教育目標	視覚障がいのある児童生徒一人一人の自立と社会参加をめざし、教育的ニーズに応じた教育を行うとともに、豊かな心とたくましく生きる力を育てる。 （ミッション）自分らしく、一人一人が輝いて生きる力を育てる。（QOLの向上） （キーワード）「伝える」

今年度の 重点目標	①学習指導の充実及び専門性の向上 ②キャリア教育の推進 ③仲間と協力する児童生徒の育成 ④センター的機能の充実 ⑤児童生徒の健康と安全を守る ⑥環境整備を通した業務の改善

年度当初							最終結果（　１　）月		
評価項目	部科・分掌	評価の具体項目	現状	年度末の目指す姿	目標達成のための方策	評価基準	経過・達成状況	評価	次年度への方策
①学習指導の充実及び専門性の向上	小中学部	○児童生徒の実態に応じた学習支援を行い、基礎的な知識の定着及び技能の習得を図る。	○児童生徒の実態について情報交換を行っているが、教材や指導方法を共有するまでには至っていない。	○教材や指導方法に関する情報交換が日常的に行われ、児童生徒の学習意欲が高まり、基礎的な知識の定着及び技能の習得ができている。	○月1回の部科会や研究会等を通じ、児童生徒の状況に関する情報交換を行い、指導・支援に活かす。 ○ICT機器等を活用し、学習意欲が高まるよう教材教具を工夫する。	指導者の支援・指導による評価 Ａ：児童生徒の実態に応じた支援・指導ができた。 Ｂ：児童生徒の実態に応じた支援・指導がだいたいできた。 Ｃ：児童生徒の実態に応じた支援・指導があまりできなかった。 Ｄ：児童生徒の実態に応じた支援・指導がほとんどできなかった。	研究授業や研究会等で、研究対象児童・生徒の支援や指導方法について共通理解し、授業実践を行うことができた。 児童生徒の学習意欲は高まり、基礎的な知識は定着しつつあるが、技能の習得については継続指導が必要である。	B	研究テーマをしっかり共通理解して今年度の研究を継続し、支援や指導方法の改善を図ったり、研究対象を広げたりしていく。
	普通科	○生徒が主体的に学習に取り組み、苦手なことや課題にも向き合い、克服できるように学習活動の工夫と改善を図る。	○様々な活動や集団活動を通して、経験を積み重ね、概ね落ち着いて学習に取り組んでいるが、自己理解が不十分であったり、苦手な活動には消極的になってしまったりすることがある。	○生徒が自らの良さ、個性を生かしながら主体的に学習に取り組み、苦手なことや課題にも向き合い、克服しようとしている。	○部科会で、各生徒の学習活動の工夫について話し合いを持ち、部科の全教職員で改善を行う。	部科教職員に学習改善・生徒の変容についてのアンケートを とり、部科会で評価を行う。 Ａ：全ての生徒の主体性や課題に向き合う態度が、取り組みによって大きく改善された。 Ｂ：全ての生徒の主体性や課題に向き合う態度が、取り組みによって改善された。 Ｃ：生徒の主体性や課題に向き合う態度が、取り組みによって改善する兆しが見られた。 Ｄ：全ての生徒の主体性や課題に向き合う態度が改善されなかった。	部科教職員（１０名）アンケート結果（Ｂ：９名、Ｃ：1名）。産業現場等における実習を含む学習や生活場面の出来事を教職員と振り返ることで生徒の自己理解は徐々に進んでいる。また、苦手なことにはスモールステップで、できることから取り組んでいくことで課題克服に取り組む生徒の姿が見られるようになってきた。	B	今年度に引き続き、様々な場面の生徒の様子や出来事を部科の教職員で共有すること、対応や学習内容を協議すること、結果をフィードバックして次につなげることを繰り返していく。
					○主体的に参加する力を育てる集団活動の場面や役割を設定する。	生徒に集団活動についてのアンケートをとり評価をする。 Ａ：全ての生徒が集団活動で役割を持ち、主体的に参加できたと回答している。 Ｂ：半数以上の生徒が集団活動で役割を持ち、主体的に参加できたと回答している。 Ｃ：半数以下の生徒が集団活動で役割を持ち、主体的に参加できたと回答している。 Ｄ：全ての生徒が集団活動で役割を持ち、主体的に参加できたと回答していない。	生徒対象のアンケートでは全ての生徒が多くの集団活動で進んで活動できたと回答した。普通科の生徒は文化祭、遠藤祭などの行事や小中普の合同遊びなど様々な場面で生徒のリーダーとして活躍する姿が多く見られた。	A	様々な活動の中で、自分の得意なところを発揮して自信を深めることと、苦手なことにも支援を受けながらスモールステップで取り組むということを部科で意識して場面を設定し、取り組んでいく。

様式２

①学習指導の充実及び専門性の向上	保理専攻科	○各生徒の学習方法に合った教材提供と、基本的な知識技能の定着、活用力の習得を図る。	○生徒は資格取得に向け、積極的に学習に取組んでいる。1，2年生は自己の見え方や学び方に合うICT機器の活用を実践することで、効果的な学習の実現が望まれる。 ○次期学習指導要領に向けた指導方法の研究への取組は今後も継続が必要である。 ○新型コロナウィルス感染予防による休校や学習活動の変更などによる学習への影響が出ている。	○ICT機器を使って学習や復習、演習問題などを行うことができ、発表や質問などにより自己の学習成果を確認できる。	○ICTを活用した学習教材や課題を出し、その振り返りを行う。 ○生徒アンケートを行い、授業や指導の改善に活かす。	ICT機器を使った学習や学習の振り返り・評価の達成度について、生徒アンケートや取組などをもとに総合的に評価。 Ａ：全員の生徒が取り組めた。 Ｂ：8割の生徒が取り組めた。 Ｃ：6割の生徒が取り組めた。 Ｄ：4割の生徒が取り組めた。 Ｅ：生徒の取組は4割未満である。	個々の見え方や学習手段にあった教材を提供している。授業や家庭学習でｅラーニングを活用している。 専攻科では一つのテーマに沿って合同学習を行った。各生徒は、ＩCT機器を活用して日頃の学習内容を事前にまとめる中で、学習を自分で深め、伝え方の工夫をしながら発表した。 生徒アンケートからも、分かりやすくまとめることで復習や定着になるという自己評価がみてとれる。	A	発表による合同学習の工夫、演習問題による振り返りや復習を設定し、自己の学習成果の確認と取組への動機づけを行う。
		○めざす姿に向けた学習や授業の改善・工夫に取組む。		○学習指導計画書の改善をもとにした授業改善について、部科全体での取組を行っている。	○各科目の指導計画書と授業の改善・工夫についての研究会を年間10回以上実施する。 ○休校時のオンライン授業や感染対策下での学習活動の工夫・充実を図り、学習内容の適切な実施をめざす。	授業の工夫・改善に対して部科としての取組状況により評価。 Ａ：工夫改善の具体的な取組が進み、全員が次年度への取組を共有できている。 Ｂ：工夫改善の具体的な取組が進んだ Ｃ：工夫改善への方向性が決まった。 Ｄ：工夫改善への方向性が定まっていない。 Ｅ：工夫改善への取組が全くない。	研究では研究授業を模範として、各自の一単元研究を部科で共有し、単元研究を深めた。 コロナ禍の中でオンライン授業をすることが増え、使用するアプリや操作技術の習得、環境整備が進んだ。一方で、オンラインでの疲労感もあり、生徒の声を元に実施時間を調整した。また、実技ができないなど課題もあり、生徒の不安の声もあがっている。	B	部科研究を推進し、授業改善を進める。 オンライン授業の改善を図り、iPadだけでなくPC活用を進める。
	教務部	○新学習指導要領の全面実施に向けて環境を整える。	○今年度より小学部学習指導要領の全面実施、来年度は中学部が全面実施となる。 ○新学習指導要領に関して教職員の理解を深めるとともに、諸表簿の様式の改善が必要である。	○育成を目指す資質・能力の三つの柱に対応するよう諸表簿の様式を改善する。	○各部科へ新学習指導要領に関する情報提供 ○通知表（小学部）と指導計画（知的障がいの各教科）の様式の改善	様式改善の進捗状況による評価 Ａ：通知表（小学部）と指導計画（知的障がいの各教科） の新様式が完成した。 Ｂ：通知表が完成し、指導計画は職員会議で協議予定。 Ｃ：通知表が完成し、指導計画は原案作成まで進んだ。 Ｄ：通知表の完成のみ。	新学習指導要領に対応するよう、通知表（小学部）と指導計画（知的障がいの各教科）の様式を改善した。	A	来年度からの指導計画の運用に向けて、新たに作成した「内容のまとまり一覧表」（各教科の内容を簡潔にまとめたもの）を基に、今年度中に実態把握を実施する。

様式２

①学習指導の充実及び専門性の向上	教育研究部	○各教科・科目等での指導・支援の充実を図り、授業の工夫・改善に取り組む。	○学習指導要領の改訂に伴い、児童生徒のめざす姿や指導支援についての協議・連携の充実を図りつつあるが、部科ごとには授業改善に取り組んでいない。 ○児童生徒は、年齢も実態も幅広く、めざす姿や学びの在り方は様々であるが学習と経験を積み重ね、繋げることで学びが深まり、主体性や人との関わる力も育ってきている。昨年度までの指導方法等の工夫を引き継ぎつつ、主体的・対話的で深 い学びを通して、新しい時代に必要な資質や能力を身につけた児童・生徒の育成に取り組みつつある。 ○昨年度の「視覚障がい教育に関する専門性の意識」のアンケートで、「概ね分かっている。」「実践がある、又は、研修等をすることができる。」と回答した職員が54.1%だった。内訳を分析すると、１、２年目の職員の意識の向上は特に大きい。今年度も新任職員をはじめ、２年目以上の職員も、更に専門性の向上を図る研修を継続していく必要がある。 ○コロナ感染症を防止するため、職員が一同に集まって密にならにように研修できる方法について検討する必要がある。	○校内の研究主題の【「何ができるようになるか・何を学ぶか・どのように学ぶか」を考えた授業づくり】に沿って指導・支援を考え、計画を立て授業に取り組む教師集団。 ○主体的・対話的で深い学びを通して、新しい時代に必要となる資質・能力（３つの柱：①生きて働く知識・技能②思考力・判断力・表現力③学びに向かう力・人間性）を身につける児童・生徒。	○年間９回のグループ研究会と月1回の部科会の研究会を部科ごとの研究会として実施 ○１回の全体報告会の実施 ○年間３回の授業研究会の実施（部科ごとで1回） ○教職員の相互授業参観を通して、お互いの授業を参観し、気づきあい学びあいをすることで研究の推進、専門性の向上、授業力の更なる向上につなげる。	職員アンケートにより、研究・授業改善について成果を感じたと答えた職員の割合で評価 Ａ：３分の２以上の職員 Ｂ：半数以上３分の２未満の職員 Ｃ：３分の１以上半数未満の職員 Ｄ：３分の１未満の職員	○研究・授業改善 各部科で、研究１年目の取組の成果と課題をまとめた。一定の成果とともに課題も出てきている。２年目の研究に向けて、しっかり改善策を検討していきたい。また、実践により児童生徒の資質・能力は伸びてきている。この成果を全体に広げていけるようにしたい。 【最終評価に関するアンケート結果】（１）計画的に研究に取組めたか。取り組めた：中間78.5%→最終83.7% （２）児童生徒の資質・能力が身についているか身についてきている：中間80.9%→最終93% ※両項目とも数字だけ見ればAだが、来年度へ向けて更に研究を充実させていくということでBとした。	B	課題について、しっかり改善策等を話し合い、職員で共通理解をして２年目につなげていく。
		○教職員が自ら研修を企画実施することで、視覚障がい教育の専門性の向上を図る。		○担当する視覚障がい教育の分野についての知識が深まり、研修を行うことができる。 ○コロナ感染症防止のため、延期や中止になった研修内容を資料等（動画を含める）を見て学ぶことができる。	○校内研修を年間１７回、視覚障がい教育に関する内容を中心に７分野に分けて実施する。 ○３年目以降の教職員は担当分野についての研修を２～３回担当する。 ○研修で使用した資料等（動画も含める）は、全職員が閲覧・活用できるように、保存場所を決め全職員に知らせる。	職員アンケートにより、研修について成果を感じたと答えた職員の割合で評価 Ａ　３分の２以上の職員 Ｂ　半数以上３分の２未満の職員 Ｃ　３分の１以上半数未満の職員 Ｄ　３分の１未満の職員	○校内研修 研修を動画撮影し、全職員で共有できるようにした。参加できなかった着任者も全員が研修を視聴することができた。研修担当者は、研修を担当することで視覚障がいの知識を深められたとしながらも、研修に関する意見や要望が多数あったので来年度にむけて改善していきたい。 【最終評価に関するアンケート結果】 （１）担当された視覚障がい分野の知識が深まったか。深まった中間88.0%→最終94.7%	B	校内研修の改善案 （研修の持ち方、研修内容や構成、着任者研修の時期、外部講師の招聘など）来年度へ向けてしっかり話し合っておく。コロナ感染防止のための校内研修や他部科の授業研究の参観方法など今年度取り組んできたことは、来年度もしっかり継続していく。

様式２

①学習指導の充実及び専門性の向上	教育研究部						（２）校内研修や授業研究、授業参観を授業改善に生かすことができたか。生かすことができた：中間35.7%→最終69.8%　あまり授業改善に生かすことができなかった：中間59.5%→最終30.2% 来年度に向けてコロナ禍における研修の工夫がさらに必要である状況を踏まえBとした。	B	
②キャリア教育の推進	小中学部	○主体的に仕事に取り組んだり、計画的に行動しようとしたりする意欲や態度の育成を図る。	○声かけをすれば、行動できるが、受け身であることが多く、主体的であったり計画的であったりすることがあまり見られない。	○児童生徒が主体的に仕事に取り組んだり、計画的に行動しようとしたりしている。	○キャリアパスポートを活用し、本人への意識づけを図り、系統的に指導を進める。 ○学習場面等を通して、適切な行動ができていれば肯定的評価を与え、自信を持 たせて行動が定着するようにする。	児童生徒の行動による評価 A:児童生徒が主体的・計画的な行動ができた。 B:児童生徒が主体的・計画的な行動がだいたいできた。 C:児童生徒が主体的・計画的な行動があまりできなかった。 D:児童生徒が主体的・計画的な行動がほとんどできなかった。	主体的に活動する姿が見られ、責任をもって取り組めるが、自分で計画して活動することは難しかった。	B	日々の活動や年間行事等の見通しを持たせ、具体的に何をすればよいか示しながら、活動できたことを称賛する声かけをしていく。
	普通科	○生徒が自己理解に基づいた適切な進路選択・決定ができるよう、キャリア教育の充実を図る。	○作業学習や産業現場等における実習を通して、働くの意味理解や自己理解を進めている。３年生と１年生では状況が異なるが、まだ卒業後の過ごし方や就労についてのイメージを十分につかめていない生徒もいる。	○産業現場等における実習の経験や就労・社会参加に関する情報提供により、適切な進路選択・決定ができる。	○生徒の状況や希望に沿った実習先の選択、事前事後指導の充実を図る。 ○ハローワークや就労・生活支援センター等の関係機関とも連携して、就労・社会参加に関する情報提供を行う。	（３者）懇談や進路希望調査の結果を受け、部科教員で評価する。 A：生徒が自己の進路を考え、進路選択・決定をしている。 B：生徒が自己の進路を具体的に考えている。 C：生徒が自己の進路を考える意識はあるが具体的には考えていない。 D：生徒が自己の進路を考える意識が不十分である。	産業現場等における実習や職場見学、社会で活躍する卒業生の話を聞く機会を設定し、生徒それぞれが進路について、自分のこととして考えた。	B	自分の適性と、進路について、保護者も含め納得のいく選択ができるよう、実習や職場見学を通してマッチングしていく。
				○1年間をかけてキャリアパスポートを作成し、自己理解が深まる。	○ホームルーム活動を中心として、生徒一人一人の目標修正などを支援し、個性を伸ばす指導へとつなげる。	キャリアパスポートを部科教職員で評価する。 A：キャリアパスポート作成により、十分に生徒の自己理解が深まった。 B：キャリアパスポート作成により、生徒の自己理解が深まってきている。 C：キャリアパスポート作成により、生徒の自己理解が深まる兆しがある。 D：キャリアパスポートを作成しても、生徒の自己理解が深まっていない。	産業現場等における実習や実習の事前・事後学習で自己理解を深めていくことができ、その後の学校生活につながり、生徒の社会参加や就労への意欲が高まった。	B	キャリアパスポートは新しい取り組みなので、今後さらに生徒と教職員が共通理解を進めていく。より有効に活用するために、キャリアパスポートを見る機会を設定したり、いつでも見られるように教室の本棚に置くようにしたりする。
	保理専攻科	○進路目標の具体化につながる体験活動や進路情報の提供、充実を図る。	○生徒たちは、現場実習や職場見学、進路情報などを通じて、自己の進路について考えているが、１，２年生については希望先が明確な生徒は少ない。	○1年生は様々な進路や理療師の役割を知る。 ○２年生は自己の目標が定まりつつある。 ○３年生は進路が決定している。	○２学期以降の体験学習や見学の実現と、事前事後指導、生徒同士の報告会などによる個々のキャリア教育の充実を図る。	各学年の達成目標に対しての状況を総合的に判断。 A：全員の生徒が自己の将来について述べることができる。 B：8割の生徒が自己の将来について述べることができる。 C：6割の生徒が自己の将来について述べることができる。 D：4割の生徒が自己の将来について述べることができる。 E：自己の将来について述べることができる生徒は4割未満である。	コロナ禍により、県外研修や県内でも現場実習などが中止になったが、２学期に各学年１か所程度職場見学を実施することができた。概ね各学年のめざす姿に近づいているが、見学ができず進路希望が定まらない生徒もいる。	B	職場見学や実習や専門性の高い講師を招聘しての講習会について、実現できるように実施方法を工夫する。

様式２

②キャリア教育の推進	支援部	○個に応じた進路情報の提供と進路実現に努める。	○生徒の居住地が全県にまたがっているため、県全域の職場開拓、求人等の情報が必要である。	○進路先や体験先の開拓及び情報提供を行うことで、進路選択の幅が広がっている。	○就労定着支援員、ハローワーク等関係機関と連携を図る。 ○キャリアパスポートを活用し、自分の夢や目標について考える。 ○産業現場等における実習や個に対応した事業所見学等、体験活動を実施する。	児童生徒の取り組みとアンケートにより、総合的に評価 A:生徒は得た情報を、将来の進路や実習先選びに役立てている。 B：生徒は自分の将来や進路に関する情報を得ようとしている。 C：生徒は自分の将来について、関心はあるが情報収集しようとしていない。 D：生徒は自分の将来や卒業後についてまだ関心がない。	生徒のニーズに応じた事業所見学を設定し実際の現場を見ることで職業選択の幅や、進路への関心が高まった。 キャリアパスポートの様式等を作成し、自分の夢について考える機会を作った。	A	ニーズに応じた事業所見学の機会を設定し、情報を提供したり、関係機関との連携を図ったりし、進路実現につなげる。 キャリアパスポートの様式等、学年、発達段階に合わせてカスタマイズする。
		○一人一人の社会的・職業的自立に向け、キャリア教育を推進する。	○キャリア教育に関する自己の課題について、児童生徒の意識に差がある。	○児童・生徒がキャリア教育に関する自己の課題がわかり、解決に向けて取り組んでいる。	○生活年齢、発達年齢にあった言葉で各自の目標を掲示し、意識できるようにする。	児童生徒の取り組みとアンケートにより、総合的に評価 A：自分の課題を意識し、自ら解決に向けて取り組んでいる。 B：自分の課題解決に向け、すすんで取組もうとする姿が見られる C：自分の課題解決に向けてアドバイスを受けて取り組んでいる。 D：自分の課題解決に向けて取組もうとする姿がみられない。	生活年齢が高い生徒は、課題解決に向け自分から取組んでいるが、生活年齢が低い生徒や発達段階によっては、アドバイスを受けて取組むなど、受け身になることが多かった。	B	自己選択・自己決定の機会を設け、自分で決められるようにする。 キャリアパスポートとのつながりを大事にし、課題が身近なものとして考えられるようにする。
	寮務部	○卒業後を見据え、自立した生活を送るように主体性を育む。	○保護者、保証人、鳥取盲学校各部科・鳥取聾学校との連携が十分ではない。連携を強め、一貫した取り組みを行 い卒業後の自立生活に向けて、舎生の主体性を育成することが課題である。	○実態把握を職員全体で共有し、舎生の主体的な行動を引き出すよう教育活動が展開されている。	○個別の教育支援計画をもとに、舎生一人一人の障がい特性を理解し、社会自立へ向けての指導支援を行う。 ○舎生に寄り添い、観察し、保護者保証人、部科との連携を密にすることで、情報を共有し、舎生の主体性を育むための生活指導・支援について、職員全体で創意工夫し、共有、実践する。	保護者・保証人、学部と連携し、個々の課題を共有・実践することで、舎生の主体的に行動する姿が（に） A：定着している。 B：つながっている。 C：つながりつつある。 D：共有・実践することが不十分で、舎生の主体的に行動する姿を引き出せていない。 E：共有・実践することができず、舎生の主体的に行動する姿につながっていない。	保護者、保証人や学校担任、関係機関と綿密に情報共有することが定着し、一貫した取り組みができている。寄宿舎訪問は効果的であった。 指導員がチームとなり舎生一人一人に見通しを持ちやすくしたり、役割を任せたり、スモールステップで支援したりすることで、舎生自身の意識が高まり、主体的に行動できることが増えた。	B	今後もチームとして支援体制を整え、保護者、保証人、学校担任関係機関等との情報共有を密に連携を取り一貫した指導支援を行い舎生一人一人の主体性を育成し、将来の自立した社会生活へつなげていく。
③仲間と協力する児童生徒の育成	小中学部	○相手の気持ちを考えた言動ができるようにする。	○身近な人には自分の思いや自分がしたい行動を伝えることができつつあるが、知らない人だったり、予期せぬ場面だったりすると自分の思いが伝えられなかったり、不適切な言動になったりすることがある。	○集団場面でも、相手の気持ちを考えた適切な言動ができる。	○児童生徒会活動等集団生活の場で異年齢の仲間と交流する機会を持ち、自分の考えが言えるようにする。 ○合同学活や合同遊びを設定し、仲間のことを考えた活動内容を発案・運営するようにする。	児童生徒の言動による評価 A:相手の気持ちを考えた言動がほぼできた。 B:相手の気持ちを考えた言動がだいたいできた。 C:相手の気持ちを考えた言動があまりできなかった。 D:相手の気持ちを考えた言動がほとんどできなかった。	相手を思いやる言葉遣いや行動が見られるようになってきたが、1人学級だと相手の気持ちを推し量ることが難しく、不用意な発言をしてしまうことがあった。	B	居住地校交流、学校行事、日々の学校生活等を通して、教師が相手の状況や気持ちを伝えたり、見守りや励ましを行ったりすることを継続する。
	指導部	○児童生徒の自己理解・他者への思いやりの心を育み、共同活動の場を設ける。	○小学部１年から５０歳代の児童生徒がそれぞれ自分と向き合い、自己理解、自己の障がい理解を進めている。	○児童生徒が自分も友だちも大切にし、仲間と協力して活動している。	○児童生徒会行事担当者の話し合いでは、全児童生徒が活躍でき、楽しめる内容であるかを考える場を持つ。行事後にも児童生徒・職員の担当者で評価を行う。	A：全ての行事の事後に話し合いが持たれ、児童生徒職員の話し合いで、みんなが十分に活躍でき、楽しむことができたと評価された。 B：８割の行事の事後に話し合いが持たれ、児童生徒職員の話し合いでみんなが概ね活躍でき、楽 ことができたと評価された。	行事の事前として児童生徒が話し合いを持つことが定着し、児童生徒のアイデアを取り入れた活動内容を設定することができた。募金の後には、お礼の音声	A	新型コロナウイルス感染症対策をしながらの児童生徒会行事の企画・運営という新しい行事のスタイルを確立していく。年齢や考え方も多様な児童生徒集団であるが、みんなが

様式２

③仲間と協力する児童生徒の育成	指導部		○年代、障がいの状況の大きく異なる児童生徒なので、状況の異なる人のことまで考えが至らず、自分本位の考えになってしまうこともある。			Ｃ：６割の行事の事後に話し合いが持たれ、児童生徒職員の話し合いでみんなが少しは活躍でき、楽しむことができたと評価された。 Ｄ：４割の行事の事後に話し合いが持たれ、児童生徒職員の話し合いでみんながあまり活躍できず、楽しむこともできなかったと評価された。	を録音するなど、必要に応じて事後の話し合いも持たれた。生徒からのアイデアで学校を元気にする歌を考え録音する企画が出され、全校での取り組みとなった。このような生徒の主体的行動も児童生徒会活動の成果といえる。		楽しめ、活躍できる活動を考えることをポイントとして今後も、児童生徒と一緒に自動生徒会活動を盛り上げていく。
④センター的機能の充実	支援部	○乳幼児支援、弱視児童生徒支援を推進する。	○個々の見え方、学習状況に対応した総合的な支援が求められている。 ○東中西の特別支援教育連絡会でＬＤ等相談員等と定期的に情報交換を行っている。 ○就学先決定に向けての教育相談のニーズが高まっている。	○関係機関と連携し､校内の人材等を活用しながら、見えにくさのある乳幼児や児童生徒とその保護者や関係者等の多様なニーズに応じて支援を推進している。	○ニーズに応じ、電話、訪問、来校等により、相談者と多く接点を持つようにする。 ○校内で教育相談の事例検討を行い、見えにくさへのよりよい対応・支援方法を模索する。 ○ＬＤ等相談員等と連携し、見えにくさ等の困難さを抱える児童生徒への支援をすすめる。 ○市町の就学担当者と連携し、相談・学校見学等交えながら、就学支援をすすめる。	教育相談等の状況を見て総合的に評価 Ａ：関係機関と連携しながら、校内の人材等を活しニーズに応じた支援を推進している。 Ｂ：校内の人材等を活用し、ニーズに応じた支援を推進している。 Ｃ：ニーズに応じた支援を推進している。 Ｄ：支援を推進している。 Ｅ：支援が推進できていない。	中部地区視覚障がい支援センターわくわくの運用が始まり、中部地区での親子教室が定着した。 感染症対策をしながら親子教室・教育相談等をすすめた。	B	就学、進学等にかかる件では、スムーズに支援が移行できるよう教育相談をすすめる。 さまざまな見えにくさに関する相談に対応できるよう、さらに校内資源の活用をすすめ、視覚障がいに関する研修を深める。
		○各市町村や視覚障がい関係機関との連携を推進する。	○昨年度、眼科医会によるスマートサイトが立ち上がり、眼科医等との連携がさらに進んだ。 ○市町の就学担当等と連携し、保護者とともに、小学校見学等を実施した。		○県内市町村の乳幼児健診担当課を訪問し、見えにくさのある乳幼児の早期発見に努める。 ○依頼等のない市町等へもこちらからかかわりを持つ。		東中西それぞれの地区で定例の特別支援教育連絡会、鳥取県視覚障がい者相談支援関係機関で情報交換を行った。 中部地区関係機関には、聾学校と協力してわくわくのチラシ配付をした。	A	定例の連絡協議会等を利用し、視覚障がいのある者の早期発見・早期支援ができるようにする。
		○視覚障がい理解を推進する。	○県内の学校や、市町村からの研修依頼を受け、依頼に合った研修内容を選び、研修等を行っている。 ○昨年度は、鳥取県ロービジョン研修会や鳥取県養護教諭の研修会でセンター的機能についての情報提供を行った。		○本校のホームページやチラシ、交差点角の掲示板の内容を精査し、最新情報に更新しながら、引き続き本校のセンター的機能の周知を図る。 ○ニーズに応じた研修会等の設定を行う。		近隣の小学校から視覚障がい理解学習の依頼を受け、感染症防止対策をしながらねらいに合った内容で実施した。	B	ホームページの定期的な更新を行う。 総合病院の眼科、ロービジョン支援の地域の眼科等訪問し、センター的機能の周知をはかる。 研修等依頼には積極的に応じる。

様式２

⑤児童生徒の健康と安全を守る	小中学部	○望ましい生活習慣や防災意識の定着を図る。	○手洗いや身だしなみ等の衛生面に課題がある。 ○危険を予測しようとしているが、不注意なことがあり、危ない場面がある。	○望ましい生活習慣や防災意識が定着し、安心安全な学校生活が送れる。	○養護教諭と連携しながら、健康教育を計画的に指導していく。 ○ヒヤリハット報告を共有し、危険を予測したり、回避したりする行動ができるようにしていく。	児童生徒の行動による評価 A:望ましい生活習慣や防災意識が定着した。 B:望ましい生活習慣や防災意識がだいたい定着した。 C:望ましい生活習慣や防災意識があまり定着しなかった。 D:望ましい生活習慣や防災意識がほとんど定着しなかった。	清潔、身だしなみ等の生活習慣について指導を継続し、必要性は理解しているが、定着には至っていない。 防災意識はあるが、日常生活の中で忘れてしまうことがある。	B	清潔、身だしなみ等の生活習慣について指導を継続していく。 計画的に災害時を想起させる学習を行い、危険回避ができるよう指導を継続していく。
	教務部	○個人に関する情報の管理方法を改善する。	○教務部が管理する個別ファイル内の個人情報や各種指導記録に、他資料との内容の重なりや、活用頻度の減少が見られる。	○個別ファイルの内容・様式・保存方法を改善する。	○個別ファイルの活用に関するアンケート結果を分析する。 ○各分掌と連携して、内容の整理と様式の改善をする。 ○より活用しやすい資料の保存方法や保存期間の検討を行う。	改善の進捗状況による評価 A：個別ファイルの内容・様式・保存方法の改善が完了した。 B：内容・様式・保存方法を職員会議で協議予定。 C：内容・様式・保存方法の原案作成まで進んだ。 D：アンケート結果の分析のみ。	各部科・分掌の意見を集約し、個別ファイルの内容・様式・保存方法を改善した。	A	新しい形での手入れを年度末に実施し、来年度へ引き継ぐ。
	指導部	○感染症予防の対策がとられ、児童生徒が安心安全に学校生活を送ることができる。	○新型コロナウイルス感染症の流行により、学校生活の様々な場面を感染症予防の視点から見直したり、個々の予防行動の実践が必要となっている。 ○小学部１年から５０歳代の児童生徒がおり、それぞれ年齢や基礎疾患、体力の状況等に応じてさまざまな健康課題がある。	○児童生徒が感染症予防に関し、安心感をもって学校生活を送っている。	○感染症予防の視点からの学校生活環境を見直す。 ○児童生徒への保健教育の充実を図る。	アンケートで評価 A：学校生活環境の見直しと、児童生徒の感染症に対する一般的な予防行動が十分できている。 B：学校生活環境の見直しと、児童生徒の感染症に対する一般的な予防行動が概ねできでいる。 C：学校生活環境の見直しと、児童生徒の感染症に対する一般的な予防行動があまりできていない。 D：学校生活環境の見直しと、児童生徒の感染症に対する一般的な予防行動がほとんどできていない。	児童生徒の評価アンケートの結果、A:7人、B：4人という回答だった。中間評価よりB回答が1人増えており、感染予防対策が習慣化している反面、コロナ慣れか意識が薄くなっている児童生徒もいる。	B	児童生徒それぞれの発達段階に応じた感染症予防対策が習慣化し、日常生活の一部となるよう引きつづき保健教育の取組を進め、呼びかけていく。
		○個々の健康課題解決に向けて取組を行い、健康的な生活を送るために支援する。		○実践をとおし、健康課題の解決に近づいている。	○学部や教科等と連携して、個別のプログラムを組み年間を通して実践していく。	目標に対する達成度で評価 A：児童生徒の目標は１００％達成できた。 B：児童生徒の目標は８０％達成できた。 C：児童生徒の目標は６０％達成できた。 D：児童生徒の目標は４０％以下の達成だった。	児童生徒から担任が聞き取った評価では、A：２人、B:７人、C：2名という回答だった。多くの生徒が８０％以上の達成度であったが、全校での周知や活動の呼びかけが不足していた。	B	全校で取り組むための活動内容の周知やキャンペーンなどに取り組んでいく。表彰や中間発表などを企画して、教職員も含め、みんなで楽しみながら取り組むことができる企画にしていく。
⑥環境整備を通した業務の改善	総務部	○共有フォルダの見直しを行う。	○担当者が、行事等計画立案の際、過去の同じ行事計画データを部科分掌フォルダ内に保存したままにするため、共有フォルダ内に同じフォルダが複数できている。 ○各自の判断でフォルダ内にデータの保存をしているため、参考データを探す際に時間がかかる。	○共有フォルダ内は、保存のルールに則ったデータ管理ができている。 ○業務に必要なデータを短時間で探し出すことができる。	○共有フォルダ内のデータ保存のルールの見直しをおこなう。 ○重複保存されているデータの整理を行う。 ○必要以上に残している個人の写真動画データについても保存の見直しを行い、個人情報流出等につながらないようにする。	A：各部科・分掌のフォルダ内の整理が過去３年分終了した。 B：各部科・分掌のフォルダ内の整理が過去１年分終了した。 C：各部科・分掌のフォルダ内の整理が今年度分終了した。 D：各部科・分掌のフォルダ内の整理に取り掛かれていない。	総務部で具体的な保存と削除のルールを提案し、各部科・分掌のフォルダ内のデータ整理に取り掛かった。	B	次年度は、年度当初よルールを周知徹底し、フォルダ内のデータ整理に努め、さらに業務改善につなげていけるようにする。

様式２

⑥環境整備を通した業務の改善	総務部	○校内外の掲示物の整備をおこなう。	○校内廊下掲示の分担があやふやで同じものが長期間掲示されている。 ○以前より校舎近くの交差点に掲示板が設置されているが、盲学校の活動や視覚障がいについて、地域のかたにお知らせするツールとして十分な活用に至っていない。	○掲示物等を含めた学習を計画し、掲示板を活用することで、時間を有効に使い業務改善につながっている。	○校内の掲示板の分担を決める。 ○期日が過ぎたポスターなどは撤去し、環境整備に努める。 ○毎月の分掌会の中で、交差点掲示板に貼るものについて決定する。 ○校内の掲示板に同じものを貼り、校内での周知を図る。	校外掲示板：掲示物張替えの頻度で評価 A：６月以降毎月張り替えた。 B：６月以降２か月に１回張り替えた。 C：６月以降３か月に１回張り替えた D：６月以降４か月に１回になってしまった。	以前より活用が不十分だった校外掲示板については、点字に係る情報の掲示を地域へ発信することで、活用の方法を見つけ出すことができた。 校内掲示については、掲示されていた児童生徒の作品をホームページで紹介し、活用を図った。	C	次年度も環境整備が必要なところを意識的に見直していく。

評価基準　A：十分達成　B：概ね達成　C：変化の兆し　D：まだ不十分　E：目標・方策の見直し

〔100%〕〔80%程度〕〔60%程度〕〔40%程度〕　〔30%以下〕

様式２

様式２

様式２

様式２

様式２

様式２